東京都
世田谷区

稽古

三味線演奏家・作曲家
本條秀太郎

伝統芸能や工芸は「口伝」でその「風」を繋いできました。日本音楽もしかり、「口唱歌＝口伝」を大事にしてきました。三味線では「口三味線」と言います。優しい曲から、少しずつ、師匠に正座で向き合って習い、楽曲や演奏技術だけではなく、魂を受け取ります。

稽古では楽器の扱い方、糸（弦）の付け方、撥の持ち方など、習得することが沢山ありますが、私は先ず「下手でも良いから行儀の佳い演奏に心を向けなさい」と言います。趣味でなさる方は特に、少しでも早く「弾けた！」と実感して演奏や発表を楽しみたいと思われるでしょうが、玄人の真似をして変に色の付いた演奏は、品格の無い詰まらないものになってしまいます。

稽古は始めに唄の稽古で旋律を覚えます。その時、三味線の旋律＝「手」が自然と刷り込まれます。次の三味線を弾く稽古は、既に三味線の「手」に馴染んでいるので覚え易くなっています。唄の稽古も簡単ではありませんが、一節覚える毎に楽しくなります。この時に大事なのは、楽譜に頼らず「口唱歌」で「掛声」と共に反復する稽古をすることです。現代では三味線も、西洋の楽譜のように縦線で区切られた楽譜を使いますが、日本の音楽には西洋音楽に無いフレーズ感やリズム感があるのです。口唱歌や口三味線は時代遅れのようでいて、人の感情の起伏や空気感を演奏に採り入れることができ、唄のブレスや三味線のフレーズ（ヒトクサリ）を理解することができる、三味線演奏には無くてはならない最も有効で優れたツールなのです。

三味線には三つの厄介な関門があります。一つ目は「構え」た時の右ひざに置く「胴」の位置、二つ目は「撥」の持ち方、三つ目は不安定な「糸」の調弦です。

すべての基礎となるのが「構え」。「構え」をしっかりと身に付けることが佳い演奏につながり、人様の前で演奏する時に美しい舞台となります。「構え」で三味線が体に密着している所は膝のみ。右手は「胴掛け」が腕の真ん中にくるように据えます。決して強く押さえつけるのではなく、そっと載せている状態。そうして、小さな「前へならえ」をすると、自然に胴が体の方に傾きます。そうすることで撥が胴に当る角度を導き出すのです。

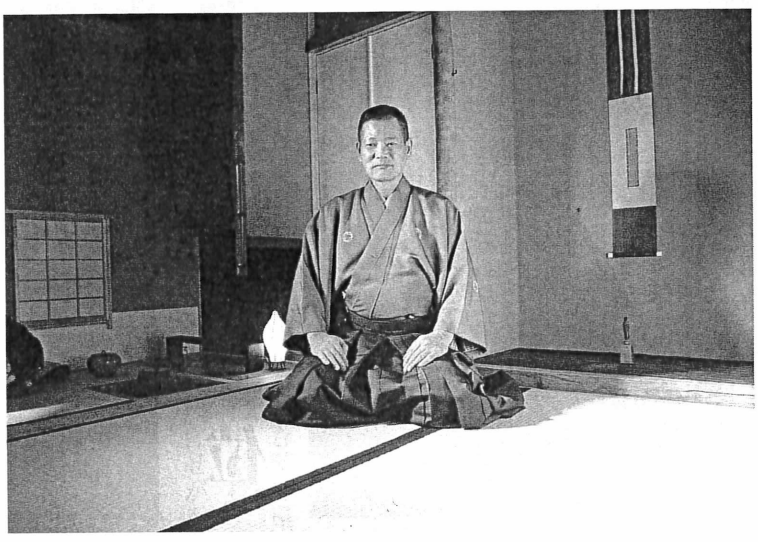
「構え」は、三味線本体の構えだけでなく、右手に持つ「撥」の持ち方も合わさって成り立ちます。一般的に、初心者には余計な神経を煩わせぬため、撥をしっかり持つよう指導するのですが、私は撥を持つ手は出来るだけ柔軟に筋肉を遣うよう指導します。これは、ただリズムを刻むだけの演奏にならず、豊かな表現をするための手法なのです。稽古を進め、反復することで、撥を持つ右手の筋肉の遣い方、力の入れ方、撥の角度などに柔軟な変化をつけられるようになっていきます。

三つ目の難関、調弦。少し前には「調子三年」などと言いましたが、近頃は音楽教育の賜物ですね、若い方たちは容易に調弦をします。ただ、三味線の糸は絹製ですので伸び縮みが激しく、演奏の途中でも調弦しなくてはならない難しさがあります。そして「勘所」です。三味線にはバイオリンやチェロと同じで、ギターのようなフレットがありません。「勘所」を押さえる指先と手の長さを意識し、自身の中心感覚から推し量って「勘所」を押さえます。三味線の開放弦のオクターブの「勘所」は丁度「臍」の場所、体の中心。「勘所」を正しく押さえるのにも「構え」が大切です。

私は、三味線を「能く出来た不便な楽器」と感じています。一筋縄ではいかぬ、不安定で壊れそうな楽器。しかし、一音鳴らしてから減衰していく音色が紡ぎだす〝刻のうつろい〟や〝余白〟に豊かな日本人の精神性を感じます。また、人格のように「音格」、個性を持ち備えている魅力的な楽器であるとも思っています。そのような三味線という楽器の魅力を引き出すために、演奏する上で心がけていること……

正座

三味線は正座をして演奏するのが基本です。日本人の生活に正座が普及し始めた頃に、三味線は日本に入ってきました。初期にはまだ片膝を立てた状態で演奏していたようです。正座は日本人の生活態度を表しているように思います。居住まいを正す、自分を律する、そして他者に対しての礼儀の意味を持っている。私自身は仏様の座していらっしゃるお姿を手本に正座します。仏の御姿からは深い精神性を感じますし、慈愛に満ちた音楽を汲み取れるように思うのです。体全体の力を抜き、高い所からスーッと吊られているような自然体の正座。三味線を自身の一部のように構えることを心掛けています。どこにも力を入れず、優しく、胴を押さえ、棹を持ち、撥を持つ。左手の指先、撥を持つ手の親指、そしてほんの僅かな微少な撥先の突起に神経を集中させます。



帯を締め、和服での演奏

日本の伝統音楽は、和服を着て、帯を締め、正座することでより佳い演奏をすることが出来るのだと思います。世界的にも、民族音楽はほとんどが伝統衣装で演奏されます。民族個々の伝統衣装はその裡に生活習慣や精神性を包んでいるのです。そこから「型」が生まれ、作法や「風」が出来るのです。声を出すにも帯を締めてとベルトをしてでは違います。帯を締めることで体は束縛されますが、声を発する時や撥を当てる時など腹に力が入り、絹のような光沢のある声や音色を紡ぎ出すことが出来るのです。

伝統より伝燈

伝統を昔のまま博物館に保存するのではなく、伝統から先人の智慧を戴き、自分自身の創意工夫に役立てなくてはならないと思います。私の師匠は「本物を観なさい、触れなさい」と教えてくれました。人の手の温もりや想いで大事に育て上げられた伝統は、まさに時代が紡いできた本物。沢山の人が日本の伝統音楽の強く温かい燈を次の世代に伝えていってくれるよう願っています。